

祝祭日には国旗を掲揚しましょう

敬神尊皇 黎



明報恩感謝

監修/日刊ひぐらし 〒151-0071東京都渋谷区本町1-30-18-107 <http://www.higurashi.net/> 第0002号
護國青年會議 <http://www.gokoku.net/> 発行人/山本修三 編集人/戸出蒼流 平成16年4月30日

呆れた人質と家族たち 東京の桜が殆ど散ってしまった4月8日夜、日本中を震撼させるショッキングなニュースが飛び込んできた。「サラヤ・ムジャヒディン」と名乗るイスラム過激派が3人の邦人の身柄を拘束し、イラクからの自衛隊の撤退を要求してきた。テロリスト達は、3日以内に撤退しない場合は、人質を生きたまま焼き殺すと言及した。これに対する政府の決定は「人質の生命の安全を最優先とするが(自衛隊の)撤退はしない」というものであった。軟弱外交を売り物にしている日本政府にしては、この決定には一定の評価を与えるべきである。



時間が経過するにしたがって判明した事がある。3人はイラクが危険な戦闘地域であるということを知りながら、警告を無視して入国し、拘束されたのである。そして家族はこの行動に理解を示すことはすれども、反対はしなかったのである。筆者の家族が同様な行動をとろうとしたら、体を張ってでも止めていただろう。3人の家族は国益を考えるとということすらしないで、開口一番テロリストの要求に従えと言う。まさに、この親兄弟にしてこの子有りである。彼らは日本人のフリをしている日本人に他ならない。普通の親兄弟ならば、先ず「国民の皆様にも多大なご迷惑をお掛けして申し訳ございません。浅はかな子供ゆえ、危険な地域と分かっていながら入国し、果ては身柄を拘束され、テロ集団に交渉カードを与えてしまい、

その結果、国家に多大な損失を被らせて誠に申し訳ございません。どうかお許し下さい」と言うのが当然である。この事件をマスコミで見聞した読者諸氏の中には、フラストレーションを感じた人がいると思う。それは3人の軽率な行動と家族の身勝手な要望を批判する意見が皆無に等しいからである。ネット上ではこの事件が自作自演であると断言する意見が多数あるが、万一この事件が自演であったならば許し難い大罪であり、厳罰に処すべきである。

27年前、バングラデシュの首都ダッカで赤軍派による日航機ハイジャック事件が起きた時、当時の首相福田赳夫は「人命は地球より重い」と述べ、多額な身代金を支払い、拘束中の赤軍派のメンバーを釈放してしまった。福田の執った措置は、取りも直さずテロリストたちを世界中に撒き散らしたこととなり、最悪の結果となってしまった。あの時の愚かな措置が招いた最悪な結果を教訓とし、二度と愚行を繰り返さないことを切に望む。 戸出蒼流

[回顧/山口二矢烈士] 昭和35年10月21日山口烈士は「ちはやぶる 神の御世代永久に 仕えまつらん大和男子は」と自作の和歌を口ずさみ日比谷公会堂に入っていった。午後3時野次と罵声の飛び交う中、演説する社会党委員長・浅沼稻次郎の巨体に正義の刃を突き刺した。左脇腹深く刺さった短刀を抜き、再度左胸を刺したところで張り込み中の公安に取り押さえられた。浅沼は既に意識は無く、殆ど即死状態であった。浅沼は中国共産党と手を結び、訪中して「米国は日中共同の敵である」と演説するなど、当時の日本共産党議長・野坂参三と並んで売国奴政治家の急先鋒であった。山口烈士の行動は憂国の思いにかられた止むに止まれぬ天誅であった。

同年11月2日山口烈士は、拘留中であつた少年鑑別所の壁に歯磨粉で「七生報国・天皇陛下万歳」と書き遺して自決した。時に山口烈士17歳の秋であった。自宅に帰った山口烈士の棺には、鑑別所の庭に咲く一輪のダリアが手向けられていたという。



天誅の瞬間

合掌

連載・吉田松陰- 萩、塩月城。かつて空高く、天守閣がそびえたこの城は、今はわずかに石垣だけを残すのみとなっている。

松陰は天保元年(1830)8月4日、この萩の城下町からはずれた山本村に下級武士の次男として生まれ幼名を寅之助といった。父、杉百合之助の禄高は26石。妻子を抱え、かたわら農業を営む貧しい生活であった。

寅之助は5才の時、山鹿流 兵学師範 吉田大助の養子となり、松陰はその幼い肩に長州藩の軍学師範として生きる宿命を背負ったのである。かつて日本有数の藩校として、その名を謳われた明倫館に9才にして学んだ松陰は翌年、藩主の面前に講義するという抜群の秀才ぶりを発揮したのである。